

「手」は人間の日々の生活で、脳や脚などと同じくらいよく使う体の一部です。そのため、「手」を使った慣用句も多く存在します。

それだけでなくさんあるからと調べ学習をすぐに終わらせることができ  
たため、このスピーチを書くことも  
簡単なのでは、と思っていたら、実  
際、書こうとなると、手が届きそう  
で届かず、何を書くか、どう書くか  
など、必死に考えないといけないく  
らい手が焼け、何とかして文字数を  
増やし原稿用紙を埋めるために手を  
打っていました。だから、これを讀  
んでいる今も、手に汗を握っていま  
す。誰かの手を借りてより良いスピ  
ーチを書きたかったのですが、皆そ  
れぞれスピーチを書いているため、  
だれも手が空いていません。一人で  
頑張つて二枚の原稿を書くしかあり  
ません。

というわけで、ここまで「手」  
を使った慣用句が六つ出てきまし  
た。気づいていただけたでしょうか。

「手が届く」「手が焼ける」「手を打つ」「手に汗を握る」「手を貸す」「手が空く」の六つです。

このスピーチのように、同じ「手」という慣用句だけでは多少くどく、本文よりそちらの方を気にしてしま  
う可能性があるため、あまり良いと  
は思えません。しかし、様々な慣用  
句を適当な数だけ文章に入れる、と  
いうのは、その意味をダラダラ書く  
より、簡潔でよく意味が分かり、よ  
り理解が深まると感じました。

お聞きいただき、ありがとうございました。

